# 「色」褪せた女性
## ―― 清末写情小説における庶民化された女性像 ――

李　艶麗

## はじめに

20 世紀初めの十年間，呉趼人（1867-1910）の『恨海』（上海・広智書局，1906 年 11 月）を代表とする「写情小説」（恋愛小説）が大きなブームを巻き起こした。古来，中国の恋愛小説は発達しており，いろいろな名称で呼ばれているが，「写情」と定義したのは，「忠」「孝」「節」「義」を中核と規定したことによる。

忠孝や善良さ，大義，貞節を守る女性が登場するかと思えば，法律を犯すまで愛を一筋に追求する女性がおり，進んで愛を告白しながら，親の許可を求め続ける女性もいる。それぞれの女性像が一つの「写情小説」というジャンルにまとめられるのは何故なのか，様々な角度から検討することが可能であるが，ここでは女性像の「美貌」に絞って社会的背景を合わせて論じたい。

写情小説に登場する女性は，何故みな庶民なのだろうか。古代小説に登場する芸も色も抜群の名妓や，伝奇小説に登場する美しい仙女や妖怪に比べると，彼女たちはあまり目立たず，また，明清白話小説の中の粗野な女性，清末の狭邪小説[1]の中の下品な妓女に比べると，非常に爽やかで素朴な感じを与える。例えば，美しい瑶瑟夫人（李涵秋著『瑶瑟夫人』上海・小説林社，1906 年）や瓊花（何諏著『砕琴楼』上海・商務印書館，1910 年）の美貌は，ただの説明的記述にすぎず，美しいからといって素行の悪い若様にかどわかされたり，官界のもめごとを生じさせたりすることはない。美しいインドの女性鳳美（呉趼人著『電術奇談』上海広智書局，1906 年。1903 年 10 月-1905 年 7 月『新小説』第 8-18 号連載）の美貌は犯人を処罰するための武器ではない。基本的に，写情小説に描かれる女性は，穏やかでおっとりした，質朴で誠意ある女性である。彼女たちは，絶世の美人と言えるほど派手ではないが ―― もちろん，容貌，心理，服装などについて作者は筆を尽くしており，自身の体験が垣間見られる場面もある。中国伝統小説からの女性像描写の継承も見られる ―― 下層女性のような卑俗さはない。ゆえに，小説中で下劣な人と乱れた事件を起こすこともなく，猥雑なこともない。

これまで清末写情小説が研究者に注目されなかったのは，恋愛小説を軽視するイデオロギー上の問題のほか，写情小説に『金瓶梅』『紅楼夢』のような波瀾万丈の筋がなく，唐代伝奇を継承するものでもなく，また才子佳人による詩文唱和も欠けていることが原因として考えられる。文言で書かれた小説『玉梨魂』（徐枕亜著，上海・民権出版部，1912 年）と『砕琴楼』は，文字表現によって文学の色が濃いが，一般的には写情小説は「文学性」を欠い

ており，「美」的なものではない。だが，このような簡素な文章で描かれた，素朴で識字能力のある一般庶民の女性像は，清末小説において中心的なイメージとなった。これは，小説創作上興味深い現象であろう。女性の容貌を淡々と描くのは，何を意図しているのだろうか。

## 第一節　写情小説の中の女性

いわゆる写情小説は，恋愛小説である。この種の小説は，名前こそ時代によってさまざまであるものの，古来，中国通俗小説の主流であった。では，近代転換期における清末写情小説は，伝統的恋愛小説を継承するものだったのか，それとも新しい近代的なものだったのだろうか。この問題に答える前に，まず写情小説の女性像を見てみよう。

- 眼含秋水，眉展春山，杏臉桃腮，柳腰云鬢。「眼に澄み渡る秋の水をたたえ，眉には草木の芽吹く春の山がひろがり，杏色の顔に桃色の頬，柳のようなすらりとした腰には雲のように豊かな髪が下りている。」（『電術奇談』の鳳美）
- 縞裳練裙，亭亭玉立，不施脂粉，而風致娟秀，態度幽閑，凌波微歩，飄飄欲仙。「白絹のスカートをまとい，体つきはほっそりとしている。べつにおしろいは付けていないが，それでいて麗しく雅やかである。静かな物腰，軽やかな歩み，放っておくとどこかへ行ってしまいそうである。」（『玉梨魂』の梨娘（りじょう））
- 為浅粧，衣皆淡色，繡履不飾，而亭亭弥麗。「顔は薄化粧，着物はみな地味な色，靴には刺繍を施さないが，すらりとして気品にあふれている。」（『砕琴楼』の瓊花）
- 一個鵞蛋臉児，両道高高的眉毛，一双秋水盈盈的媚眼，一張櫻桃小口。「卵形の顔，高い位置にある眉，澄み切った水をたたえたような潤んだ眼，さくらんぼのような小さな口。」（『禽海石』の紉芬（じんふん））
- 修眉画螺，皓歯編貝。一点朱櫻唇小，両旁粉頰渦圓。「螺黛（らたい）（まゆずみの一種）を使って整えられた眉，綺麗に並んだ白い歯。さくらんぼのような小さな唇に，両隣の薄紅の丸い頬。」（『情変』の阿男（あなん））

これらの例のように，写情小説では女性の身なりや化粧の美しさよりも，女性が本来持っている自然美を叙述することが多い。しかし，本論では女性の容姿を羅列するより，写情小説の代表作を通して，女性像の類型をまとめてみよう。写情小説に登場する女性は，ほとんどが称讃に値する，忠誠，善良，貞節，忍従，寛容，堅強，勇敢といった品格を備えた人たちである。細かく分析すると，三種類に分けられる。

一つ目は，伝統的女性に近いタイプである。夫と親に忠誠を尽くし，優しい。好きな人のために，恥を忍んで重責を担い，女性の強靭さを強く持っている。これは強い女である。

本論冒頭に名前を挙げた『恨海』は，写情小説の祖と言われ，庚子之変 (2) の動乱期における，若い男女の不遇な運命を描く。張棣華（ちようていか）と陳伯和（ちんはくわ）は慕い合い，「父母之命，媒妁之言」を通して夫婦の名分を立てた。しかし，礼教では結婚前の男女は貞操を厳しく守らなければならないので，棣華一家は故意に引っ越しをする。後に，戦火から避難する途中，棣華は病気になった伯和を憐れに思うが，「発乎情，止乎礼」（情に発し，礼に止まる）(3) という古来の戒めを思い，「情」と「礼」との間に板挟みとなり，苦しくつらい時間をすごす。母が病気になると，彼女は自分の腕の肉を割いて，薬といっしょに煎じるという親孝行をする (4)。一方の伯和は下品にも廓で遊蕩し堕落する。それでも，彼女は婚約を守り，親切に世話をして彼を感化しようとする。そのうち，伯和は死去するが，まだ結婚していない彼女は「女子従一而終」（女子は一に従いて終わる。一人の男性に添い遂げる）の願望で尼になる。

『劫余灰（ごうよはい）』（呉趼人著，1907 年 11 月-1909 年 1 月『月月小説』に連載。1909 年，上海広智書局単行本）の主人公の陳疇（ちんちゆう）は，何者かに連れ去られた後，シンガポールで労働者になった。物語は彼のフィアンセである婉貞（えんてい）を中心に展開する。婉貞は伯父によって廓に売られ，自殺を図ったが，甦って逃げ出した。途中，身分の高い官吏に救われ，侍女として平穏な生活を始めるが，妾になることを強要される。断った婉貞は猛打を浴びせられ，辛うじて一命を取り留めた。尼寺に泊めてもらい，どうにか帰郷することができたものの，姑に嫌われる。しかし，彼女は何も文句を言わず，死んだと言われた「夫」のために 20 年間の貞潔を守る。ところが，陳疇は妻子を連れて帰ってきた。婉貞はこの「妻」を正妻と認め，大団円の結末を迎える。

二つ目は，現代の女性に近いタイプである。自分の愛を強く求め，好きな人に進んで告白し交際する。これもある種の勇敢さである。だが，彼女たちは完全に親（家庭）の意見を無視して，愛だけを追求することはできない。親の許可を待ちわびて，鬱々として死んでしまう。

『恨海花』（非民著，新学界図書局，1905 年）は聚鉄（しゆうてつ）と鐘儀（しようぎ）の愛情と悲劇を描く作品である。聚鉄は鐘儀の兄の友人である。病気にかかった兄を世話している聚鉄と書簡をやりとりしているうちに，鐘儀は聚鉄と恋に落ちた。鐘儀は大胆にも聚鉄に愛を告げ，親の承諾を得ない結婚を申し入れる。しかし，聚鉄は家柄が違うため，劣等感を抱き，断った。鐘儀は悲しむものの，ずっと聚鉄を待っているという意志を伝える。父の許可を待つ間に，鐘儀は病気で亡くなってしまう。

三つ目は，現在でも比較的特別なタイプである。愛のために，身の危険をも顧みずに勇気を奮って進む。親（家庭）を捨て，夫を殺して，愛人と駆け落ちする。むろん，刑罰を科される結末が待っているが，「如蛾赴火」(5) の故事のように壮烈である。これは先の二類型と同じような「勇敢」さであろうか。たしかに，伝統道徳の標準によって批評すれば，三つ目は明らかに正常な倫理道徳に違反し，たとえ現代においても違法行為とされるであろう。

『情変』（呉趼人著，1910 年 6-9/10 月『輿論時事報』に連載。同年，時事報館単行本）は揚州の田舎娘・寇阿男（こうあなん）と同じ村の青年・秦二官（しんにかん）の愛情悲劇を描く作品である。幼馴染の二人は愛し合っている。しかし，大道芸人と読書人という家庭の違いから，婚約するには無理がある。阿男の両親は白蓮教 (6) の残党であり，武術や幻術に長じている。彼らはこれらをすべて娘に教え込んでいた。阿男は二官を恋慕し，夜，身軽に屋根を伝って，塀を乗り越えて二官と密会する。噂になると，二官は鎮江に逃げ，両親の決定によって何家の娘と婚約されられる。阿男は両親に連れられ，北方に行く途中，逃げて鎮江で二官を奪い，二人は杭州で結婚して家をつくった。しかし，双方の両親に見つけられ，それぞれ別の者と結婚させられる。未完の小説だが，巻首の回目（巻頭）からは，阿男は夫を殺し処刑され，二官は刑場で自殺，妻は子供を育て貞潔を守り通す，という結末が想像される。『情変』を代表とするこの種の女性は，悲惨な結末に至るが，駆け落ちなどを淫蕩と非難されることはなく，愛すればこその勇気がある，と積極的な描写がなされた。

以上，四つの例を挙げただけでも，写情小説の女性像を表すことができる。その主要な特徴は，忠誠，貞節，情け深さ，大義，大胆な愛の追求と要約できるが，実はこれらの形象は，これ以前の中国小説の中でも主要な特徴として存在してきた（同様に，軟弱な白面書生の男性像も，いくらでも見られる）(7)。また，写情小説の悲劇的結末は，昔の大団円の紋切り型を突破するものと批評できるが，こうした種類の恋愛小説の最高峰と目される『紅楼夢』はすでに世に出ていた。

しかし，これまで見てきたように，写情小説の女性はほとんどが閨房を出て，社会に入る。つまり，「社会的背景」は清末写情小説と古代恋愛小説とを区別する一つの特徴と言えよう。それは，『金瓶梅』のような世態風俗の縮図としての社会背景ではなく，国事，国家の運命に結びつくものである。現実の「社会」に入った人物として，写情小説の女性は庶民化・大衆化され，さらに普遍的な意味を勝ち得るだろう。ゆえに，彼女たちは伝奇小説の中の色っぽい女子ではなく，高貴な皇女でもない。明清白話小説の中の粗野な女性ではなく，書を読み，道理に通じた美しい女性である。彼女たちの運命は，架空の神話でもなく，家庭や市井で展開されるものでもない。国勢の影響のもとで，幾多の曲折を経る。

なぜ女性像がこのように変化したのだろうか。麗しい「美人知己」（良き理解者）という言葉が示すように，文人の分身とも見られる「美人の知己」はそもそも「才子佳人」（小説）の主人公である。「文」のすべてが美とされる中国では，文の持つ優美さが重んじられている。だが，清末写情小説ではこれらを写実的に描いている。もし「美人の知己」が文人と美人の間の連帯感を表現するならば，「美人」が庶民化されると，庶民の中の最上位である「文人」も大衆化されることを意味するだろう。ただ，この変化は，清王朝が崩壊する直前に起こったことではなく，もっと早い時期に発生した。

## 第二節　美人の知己から期待される良家婦人へ

### 1）才子佳人小説の中の美人の知己

古代の人情小説という言い方には，多くの意味合いが含まれる。それらを本論文で検討する意図はないが，いわゆる人情世態小説は，神話霊異小説と相対し，人世，人事，人情を直接に描く[8]。またこの種の小説には，男女の愛情を描くもの，不合理な社会や悪い習俗に憤りと憎しみをぶちまけるもの，人心の善悪，人情が変わりやすい世の中を描くものがある。

言いかえれば，人情世態小説は，神話霊異小説，歴史演義小説の焼き直しである。ゆえに，明末清初の『金瓶梅』『三言』『二拍』は，豊富な題材を通して社会生活の多方面を反映するところから，世情派と呼ばれていた。だが，それは，通常言う「恋愛小説」とはやや異なっている。今日言うところの恋愛小説に近いのは，明末清初，主として清初に現れた多くの恋愛と婚姻を描く，才子佳人小説である。

いわゆる才子佳人小説は，才子と佳人の出会いと結婚の話である。「従来の伝奇小説は，常に興を才子佳人に託している」[9]。才子佳人は通常の美的イメージではなく，自由恋愛を唱え，親の指名する婚姻に反対する。魯迅は『中国小説史略』において，才子佳人を論じ，その筋書きの紋切り型の傾向をまとめ，才子佳人の源流を次のように指摘している。

> 『金瓶梅』『玉嬌李』などは世に歓迎され，それを模倣する者が次々と現れた。また内容は異なり，人物も事柄も違っているが，ただ書名だけ踏襲する場合もあった。『玉嬌梨』『平山冷燕』はその例である。叙述は大抵才子佳人のことであり，その行間を文雅風流の言葉で飾り立てている。科挙試験への合格とか，偶然の出会いとかを主題とし，最初は不如意なことも多いが，多くは幸福な結果になる。ゆえに，当時は「佳話」（いい話）と呼ばれていた。主旨から見ると唐代の伝奇に近いが，関連はない。才子佳人小説の多くは，官僚の娘の話であるから，時代が異なっていても，事跡が似ているため，偶然にも類似している。必ずしも模倣とは限らない。[10]

以上から才子佳人小説のいくつかの特徴が明らかになる。

(1) 才子佳人小説は，風雅風流を尊ぶ。
(2) 官職名声を目的とし，偶然の出会いを始まりとする（一目ぼれなど）。
(3) 唐代の伝奇小説に類似する。
(4) 女性の登場人物は，主に「才人」である。

これらの官僚家庭の娘を主人公にする物語は，封建社会の中上層階級の生活を描いている。

そのほかに，才子佳人小説の中には悪人に唆されてもめごとが起こるとか，才子と佳人を別れさせるとかといったことがしばしば見出される。このような特徴の設定によって，才子佳人小説は，(1) 自由恋愛，(2) 愛に忠誠を誓い，貞節を守る，(3) 縁がある恋人たちが最後にめでたく結ばれる，という主題を構成する。清末写情小説はこれらの主題に近いため，人物像も類似するわけであろう。

だが，才子佳人小説に登場する人物の身分設定は，写情小説のそれとは異なっている。即ち，官僚あるいは資産家は，平民女性と異なる階級である。必然的に物語の展開は両者で異なり，書き方も結末も異なる。才子佳人小説における上層階級の物語は，常に朝廷と皇帝に結びついている。男女はめぐり合わせによって付き合い，詩詞唱和を恋愛の手段とする。つまり，色恋と詩詞風雅が強調される。結局，官職，名声を重視する封建的社会体制の中で男性は科挙に及第し，円満に結婚することができる。これが才子佳人小説に見られる「公式」（紋切り型）であるが，これは「奥の庭園で秘かに結婚を約束し，落ちぶれた若様は状元に及第した」（“私訂終身後花園，落難公子中状元”）(11) という一文に要約することができるだろう。

ここで才子佳人小説が強調する「才」は，男性に対するだけでなく，女性に対しても求められ，文学的素養が必須とされる。女性の読書と識字が制限されていた明清時代では，それは明らかに現実と遊離していただろう。「佳人」は高官や身分の貴い人であり，たとえ家父長制や悪人のために災難に遭うとしても，彼女たちの災難は，一般的な社会の平民とは無縁である。

このような構想は，唐宋の伝奇，元代の戯曲の創作と深く関わっている。唐宋伝奇には，才能が秀でて，美しく貞節な妓女が多く登場する。青楼（妓楼）文化は中国では，悠久の歴史があり，文人と妓女の話は，いつも美談と見なされている。その際，もっとも多い評価は，言うまでもなく「紅顔知己」である。美しい女性は紅顔であるが，必ずしも知己（良き理解者）というわけではない。相当な文学的素養を持っている人であれば，文人と詩文唱和ができ，心を交わして交際することになる。

しかも，紅顔はほとんど身の上が惨めであり，官僚や富豪の家の娘（妻）にはなれない（良家の娘だからといって幸せな婚姻ができるわけではないが）。これは，文人も社会体制における地位，つまり科挙試験のために一生懸命勉強しなければならないが，必ずしも成功するとは限らないという事実と対応する。そして，才気が大きければ大きいほど，失望も大きい。傅山（1607-1684 年。明末の文学者，思想家）は「名妓失路，与名士落魄，賫志没歯無異也」（名妓の路を失うは，名士の落魄し，志を遂げられずに生涯を終えるのと異なるところ無きなり）(12) と言い，兪達（ゆたつ）（?-1884）は『青楼夢』（文魁堂，1888 年）の序で「美人淪落，名士飄零，振古同斯，同声一哭」（美人の淪落，名士の飄零は，振古より斯れに同じ，声を同じうして一哭す）(13) と言う。

**2）才子佳人小説の衰退 ――社会小説への転換**

ところが，明末になると，才子佳人小説は次第に伝奇小説の青楼（妓楼）情緒，官僚という設定を離れるようになった。

明末，社会経済の発展に伴い，道学の「天理」の束縛を破り，「人欲」を満足させようとする思潮が起こった。言うまでもなく，これは小説の創作に影響を与えている。才子佳人小説は，自由恋愛を主題として従来の封建的婚姻観に挑戦し，一つの理想とも言える模範を提供している。また，明末，王朝が変わり，小説家は敏感な題材を回避して，直接に政治を批判することを控えるようになる。才子佳人小説は恋愛を借りて胸の内を述べ，鬱憤を晴らしたり[14]，黄粱の夢を実現させたりしている[15]。

例えば，清初の才子佳人小説の創始者という天花蔵主人は，多くの作品を執筆し，また他人の才子佳人小説に序を多く寄せている[16]。順治十五（1658）年に出た『平山冷燕』（天花蔵主人序，荻岸散人（てきがん）編次）には次のような序がある。

> しかたがないから，根も葉もないことを借りて，黄粱の夢を吐露する。時には，色香を援用して，男女恋愛のことを書く。時には，友人と意気投合することを書く。時に危険で恐ろしい事件を書けば，大臣は顔色を変える。時に怒髪天を衝くような事柄を書けば，天子は表情を変える。紙に書かれた喜ばしいことや恐ろしいことは，すべて私の胸の内にある歌いたいことと泣きたいことだ。[17]

ここには知音を求める理想だけでなく，国に関心を持ち，これを批判する志が含まれている。この特徴は，唐代伝奇から伝統になったというが，中国文学史から見ると，「託物予志」（事物に志を託す）という理想の原型は，屈原の「香草美人」[18] にまで遡ることができる。清末写情小説にもこのような傾向が見られる。

康熙年間（1661-1722）になると，才子佳人小説は単なる恋愛と婚姻の物語ではなく，神仙妖怪，歴史，戦争，科挙，僧侶と妓女の話も挟み始める（『鉄花仙史』『帰蓮夢』『錦香亭』『鳳凰池』『快心編』など）。才子佳人小説を整理する研究者・林辰（段徳成。1928 年生。大連明清小説研究センターの創設者）は，次のように指摘する。

> 前期の才子佳人小説は公式化のきらいがあるが，それぞれに長所がある。だが，康熙朝になると，全方位的な作品が出てきた。例えば，『鉄花仙史』は才子と佳人の出会いから，吟詠，科挙，仕官，神仙妖怪，妓女，駆け落ち，悪少年，戦争など多くのことに言及し，何もかも含んでいる。[19]

また，娥川（がせん）主人を代表作家として挙げると，彼の『生花夢』（康熙十二年＝1673 年）は才子佳人小説の典型例ではあるが，後に記された『世無匹』『炎涼岸』は才子佳人に見られる

ような特別な婚姻ではなく，一般庶民の家庭生活を描いている。これは，才子佳人小説が比較的単純な題材から，比較的広い社会生活へと拡大し，婚姻から家事，世情，国事に深化していく傾向を示している。

**3）庶民の女――現実に向ける目**

才子佳人小説の「才」は家柄ではなく，人の才能を表しているように見えるが，「才子佳人」とは，実は家柄と財産が釣り合っているカップルでもある。この種の小説は，一方で愛に忠誠を尽くす品格を高らかに歌っているが，他方で一夫多妻制を美化し，嫉妬しない賢妻の典型例（理想像）を打ち立てる（『玉嬌梨』『春柳鶯』『玉支磯』『麟麟児報』『定情人』など）。

それに対して，清末写情小説の女性は，ほとんど学問と道理に通じる女性だが，作者は彼女たちの文才を比較的なおざりにする感がある。夫と恋人との詩文唱和は，あまり誇張されておらず，多くを描いてはいない。文字ゲーム，詩文鑑賞という楽しみは，生活の紆余曲折に変わり，日常の瑣事になってしまう。あたかも絵巻の中の鴛鴦から，俗世の夫婦になったかのようである。

前節でまとめた写情小説に登場する女性像は，忠誠，善良，貞節，忍従，寛容，堅強，勇敢といった品格を備えた人たちである。伝統的女性像に近いタイプか，現代の女性に近いタイプ，あるいは比較的特別なタイプであっても，近代転換期における「近代文人」の個性解放と愛の追求を「理想」としていることが理解できるだろう。さらに，このような個性解放と堅強不屈（けんきょうふくつ）の性格は，女性が強ければ中国が強くなるという時代の思潮も反映している。

では，なぜこのように変化したのか。時局の動揺のもとでは，誰もが国家に関心を持ったが，古来より修斉治平（修身，斉家，治国，平天下という立身出世の教訓）[20] の使命を担ってきた士大夫階層はなおさらであった。しかし，明代以降，商業経済の発展と共に，庶民階層は経済的実力を持つことによって，多くの権力を得るようになった。それに反して，士人の地位は次第に下降してきた。官界が横行し，売官売位は，科挙制度の腐敗を加速させた。1905 年に科挙制度が廃止され，数多くの文人が生存する経済的基礎を失い，苦学と人生の目標が失われ，瞬く間に路頭に迷ってしまった。だが，科挙の仕途が断たれると同時に，近代社会の発展は新しい生活の道を提供してくる。事実，19 世紀末には，小説を寄稿して，原稿料をもらうことによって生計を立てる文人がすでに現れ始めた。

このような時代，高い地位にあった文人は，経済，社会における特権を失い，「不遇」を嘆くよりも，まず目の前の生活に血眼になった。写情小説の登場人物は，ほとんど庶民として設定されている。読書人の家柄であっても，官僚の子弟ではない。富裕な家柄であっても，田舎の紳士にすぎない。千篇一律に男性主人公は「文人」と規定され，『玉梨魂』が言うように――「古人云，得一知己，可以无恨（中略）名士沈淪，美人墜落，怜卿怜我，同命同心」（古人云えらく，一たび知己を得れば，以て恨み無かるべし（中略）名士沈淪し，美人墜

落す，卿を怜れみ我を怜れみ，命を同じうし心を同じうす）[21]―― 知己への渇望も示されるが（特に文言小説の場合はこの特徴が濃い），彼らは何と言っても庶民化された士人階層である。

才子佳人小説は絶世の美人の登場および様式化された筋を以て，数百年も続いていた。このような審美観は青楼（妓楼）文化とともに，すでに文人に必須の風雅となり，馴染みの文学様式であった。ある意味では，才子佳人小説は理想的な物語である。しかし，士人の地位は下降しながら，次第に「商」に近づいて売文生活を営んでいる。理想的な物語も，次第に写実的になっている。ここで言う写実とは，社会の現実だけでなく，文人の自画像をも描くことを指す。青楼（妓楼）文化は卑俗な金銭交易に変わり，一世を風靡する花魁（おいらん）は下品な妓女に変化し，風雅が悪臭になったとき，文人は新しい女性像を作らなければならなかった。彼女は美しくてもいいが，美貌を以て生計を立てる俗世の女性ではなく，穏やかで品行方正な婦人である。彼女は書を読み道理が分かってもいいが，深窓の令嬢ではなく，一般庶民である。だが，彼女は清末ではもっとも代表的な女性像となった。彼女は「美徳」で輝いており，このような「美」は，赤裸々で無情な「社会」によって表現されているのである。

## 第三節　「社会」を経験する女性

### 1）写情小説における社会描写

研究者が重んじる写情小説の「社会的背景」は，果たして女性の運命と結びついているだろうか。次に例を取って考察してみよう。

『電術奇談』の主人公はイギリス人青年とインドの酋長（しゅうちょう）の娘である。インドはイギリスの植民地であった。文明国の男性として，彼は植民地の女性との結婚を躊躇する。この心配は，女性の発する言葉から検証できる。

> 私はアジアの女性ですから，妻として迎えると，きっと家柄を穢すとあなたはお思いでしょう。だから，早く断念するほうがいいと思われているでしょう。あなたはご自分の利益ばかりお考えですが，私の一生を考えることはないのですね。[22]

それに対して青年は，「召使いとお嬢様とでは階級が違い，種族も宗教も異なっている」[23]と自己弁護する。

女性が愛を追求するこの物語は，もともと短編（元来は日本の菊池幽芳の小説「新聞賣子」の翻案）だったが，呉趼人は加筆により長編に改編した。主人公は，医学者である友人の行った催眠術実験中に不慮の事故に遭って死亡した。これは，18 世紀にヨーロッパで興った催眠術や 19 世紀の心理学，科学実験の流行を背景に置いている。また，私立探偵の追跡調査は，イギリスのコナン・ドイルによるホームズを主人公とした探偵小説の流行と関わ

っている。探偵小説は，古代中国の公案小説[24]と大きく異なり，医学や化学などの科学技術を利用する新しい小説である。それはちょうど二十世紀初頭の「啓蒙」という主題と並行して現れる。

『劫余灰』に登場する男女の主人公は，ともに誘拐され売り飛ばされる。広東の南海県の婉貞と父は，叔父に騙されて省都に行った。そこで婉貞は行方不明になった。父は娘を探すために香港まで尋ね歩く。当地の人は，彼に次のように注意した。

> もしかしたら，騙された香港まで来ているのではないか。あなたの方こそ売り飛ばされないとも限らないから気をつけなさい。香港は，あまり良いところではない。[25]

娘は実は，広西の遊廓に売られたのだった。また，行方不明のフィアンセ耕伯は，友人と一緒に香港へ競馬を見に行っていた。そこで誘拐されて南洋のシンガポールに売り飛ばされ，道中，さんざん虐められた。シンガポール到着後，

> あるところ（港）に着くと，みなを追い立てて上陸させた。一つの部屋に入れると，我々を麻袋に仕舞い込んだ。そして誰かが値段の駆け引きをして，台秤で一人一人の麻袋を計り，また足で麻袋を蹴飛ばした。（中略）この煙草畑では，五百人も働いているが，毎日殴られて蹴飛ばされ，鞭打たれて，飢えと渇きに苦しんでいる。月に少なくとも二，三十人は耐えられずに死んでいった。[26]

作中では二種類の人身売買が描かれる。前者の女性の例は，清末社会の動揺，人口流動に関わっている。当時，妓楼が氾濫し，江蘇省・浙江省からだけでなく，広東や外国からの妓女も多かった。後者の男性の例では，中国人労働者は反米禁約運動を反映している。米国は華人を差別視し，清朝と不平等条約を結び，中国人を排除しようとした。1894 年，米国の圧力のもとで，清政府は「中美会訂限制来美華工保護寓美華人条款」を締結した。中国人労働者を米国から排斥する禁約である。10 年後の 1904 年，条約の期限切れに際して，10 数万人の在米華僑が条約廃止を提起した。だが，米国はそれを拒否し，新たな契約を継続しようとした。翌年，上海，広州，天津などの都市が米国に抗議し，アメリカ製品を排斥した。海外の華僑や留学生も次々と反米愛国運動を行った。

『恨海花』においては，上海の西洋式女学校で学んでいる女性が，恋人に愛を告白する。自由恋愛の意識を持つ男女二人は，英語でラブレターを交わしている。人の目をごまかし，才能を誇示する意味もある。当時，外国を訪問し，英文を習い，舶来品を使い，西洋料理を食べることは開化と看做され，流行していた。

作者はヒロインを「Miss Zhong Yi」（密私鐘儀），主人公を「聚鉄夫子（せんせい）」（聚鉄夫子）と呼ぶ。一方は高い地位を示す洋風の名前であるが，他方は，先生や読書人に対する古臭い敬

称である。デートの際，女性は洋装をしている。纏足していない足で革靴を履き，化粧をせず清らかである。また，英語で会話している [27]。

また，「中国の風俗は野蛮で，不自由なのは君と僕だけではない」[28] という言葉は，当時の青年，とりわけ西洋の学問を学んだ若者が，親の決めた結婚を憎み，自由結婚に憧れる心情を訴えている。また，彼女は恋人を励まして，「天演競争（生存競争）は日一日激しくなり，優秀でない人は生存することができない」[29] と言っているが，この言葉は厳復の名訳『天演論』（ハクスリーの『進化と倫理』）から影響を受けたのだろう。

『瑶瑟夫人』中の脇役・榕玉（ようぎょく）は，英国と中国の文明・野蛮を対比している。英国は文明国であり，女性と男性の交渉は認められているが，中国は男女の境が厳しく分けられ，女性を玩具として弄んでいる [30]。つまり，中国は男女の礼儀を固く守るが，実際の行動は異なっている。表向きはまじめだが，実は酒と女色におぼれきっており，女性も秘かに異性を慕い思っている。この言葉は明らかに中国の封建道徳，見せかけの風俗を諷刺している。

『情変』の阿男は，武芸を両親から習った。その親は白蓮教の残党である。作者が冒頭で白蓮教について説明するのは，そのような武芸を身に着けたからこそ，後に白鳳と私通できたと言いたいがためである。

白蓮教は，ペルシャから伝来したマニ教に端を発する。唐代に中国に伝来し，明教とも呼ばれている。歴代，民間の一揆には白蓮教名義のものが多い。ゆえに，朝廷は白蓮教を反逆，邪教と看做している。明代の『明律』では，「左道邪術」（異端）の白蓮教を取り締まることを明確にした [31]。乾隆三十九（1774）年，山東省の教徒・王倫は騒乱を起こし，政府を驚かせた。清代，白蓮教の「反清復明」運動は絶えたことがない。この小説は，白蓮教を異端と看做し，教徒は惨めな結末になると主張する。実際，阿男は悲惨な結末を迎える。

『玉梨魂』では，革命や新たな学問の探究，留学ブーム，武昌蜂起 [32]，読書人の従軍など，多くの社会的問題が言及される。夢霞の友人石痴は，近年の洋学界では一流の人物として知られている。二人はいつも詩文を詠み，天下のことを論じる。「今や，我ら青年が黄色人種を救い，奮起して行動を起こす時期になった」[33]。夢霞の妻筠倩（いんせい）は，女学校に入り，様々な賢婦人と付き合い，見聞を広め，学問をたちまち進歩させた。彼女は，かつては閨房（家庭）内に限られていた不平の気をぶちまけることができた [34]。

夢霞と筠倩は，新時期に新学を受けた熱血青年のようである。恋しい梨娘（りじょう）に忠誠を表すため，夢霞は指を嚙んで血書 [35] を書いた。血は，情を作る要素である。流血したのは，愛情の力が働いたからである。情は，男女恋愛の「私」から国家存亡まで，重要な役割を果たす。だから，男女の恋愛に血を流す者は，必ず国家への愛のためにも血を流す [36]。そして，筠倩が亡くなったのち，夢霞は日本に赴き，毎日悲嘆にくれていたが，結局帰国して武昌蜂起に参加，最後は戦死する。

以上のように，写情小説の舞台は，どれも不安定な社会背景下に設定されている。女性

の運命は「社会」に翻弄されるが，彼女に「社会」を糾弾する意図はない。作者にその意図がないからである。例えば，『禽海石』（上海・群学社，1906 年）の著者・符霖は，

> 天下の心ある人たちにこの写情小説を読んでもらいたい。これを読めば，同じ人種の者を愛し，祖国を愛する考えが勃然と湧き起こってくる。そのことで男女の愛情も拡大されるだろう。(37)

と堂々とした思いを表したが，果たして読者は小説から愛国や愛民の思想を読み取れただろうか。その答えは否である。

また，例えば，『玉梨魂』は，初めから終わりまで，恋人同士の付き合いを語る恋愛物語だが，時事を挟んで，主人公が国に命を捧げるところで終止符が打たれる。これで小説の意義が向上して，男主人公が高く評価されるだろうか。その答えは恐らく否であろう。

『劫余灰』の背景には，海外の中国人労働者の悲惨な運命がある。この「背景」があるからこそ，研究者はこの小説を重んじるわけである。だが，この小説から，当時の中国人労働者の海外における悲惨な生活状況は考察できない。また，この小説を読んでも，反帝国主義や高揚する精神が生まれるとは言えない。

つまり，写情小説の主旨は国家の情勢を議論することではないので，矛先を清王朝や外国列強に向けることはなかった。結局読者は，国を憂い民を憂う気を起こすことはない。「社会」はただの背景として説明されるだけである。それにもかかわらず，女性は「社会」の中で鍛えられ，忠孝節義を守る逞しい人物像として作られている。これらの社会的背景は，小説家が主張したい「道徳」を形づくるものだが，写情小説における恋愛の重要性を覆い隠すことはできない。

**2）庶民的女性像の矛先 ―― 狭邪小説**

近代以前，女性を批評する言葉は多いが，「紅顔薄命」と「紅顔禍水」は端的に女性の社会的地位を表現している。前者は，伝奇小説に登場する節操の高い名妓を表現する場合が多い。つまり文学の教育を受けた女性は，天（神）に嫉妬されることが多く，いわゆる才女は若死にするという意味である。後者は，朝野の政治，国家の大事に関与する女性は，美貌が政治の妨げとなり，「災禍」（「禍水」）と看做される（妲己(38)，西施(39)，虞姫(40)，楊貴妃(41) など）。だが，これらの美人はあまりにも特殊化されて，中国の女性を包括することができない。では，清末写情小説は比較的等身大に近い女性，言い換えれば素朴で地味な女性を読者の前に提示する場合，どのようにして読者を感動させるのだろうか。

前文に触れたように，写情小説の女性は伝統的美徳を備えている。しかし，この美徳はどの時代でも共通している。とすれば，わざわざそれを宣揚する目的はどこにあるのだろうか。それは，女性（の美徳）を借りて男性（士人）の道徳を呼び起こす点にあるという考

えを，筆者は述べたことがある[42]。ここでは女性像に限って言うと，写情小説の批判の矛先は狭邪小説（花柳小説）であろう。地味だが，徳がある。これは時代が必要とする精神であり，新民[43]を作るための理想の女性像である。清末写情小説は自己の立脚点を権威的な「道徳」に求めたが，ここからは「道徳」が論じられるべき時代の緊急性が窺われる。

孫楷第[44]は『中国通俗小説書目』「明清小説部乙：煙粉第一」において，人情，狭邪（花柳界），才子佳人，英雄児女，猥褻という五つの項目を設けている。そこから，人情と狭邪，すなわち写情小説と狭邪小説は，男女恋愛の面において通じるものがあるが，同じではないことが明らかに分かる。

狭邪小説は，すでに注記したように，主に19世紀の半ばごろから19世紀末まで現れた遊廓，梨園（演劇界）を中心に描くものである。最初は，名士，名妓，名優を主要な対象としていたが，19世紀末になると，次第に下層の妓女と堕落した士人（客）との関係について工夫を凝らすようになる。このような文人の芸者遊びは，数え切れないほど多い。唐代から，士人は科挙の試験が終わると妓楼に行き，芸者を上げることに慣れてきた。それは歴史的に文人の一つの風習となり，世の中もそれを佳話と看做している。ゆえに，このような文章を書く文人は多い。唐代の伝奇には，『遊仙窟』『霍小玉』『李娃伝』『崑崙奴』，崔令欽『教坊記』，孫棨『北里志』がある。宋代には，『譚意哥伝』『李師師伝』『緑珠伝』などがある。明代，白話小説が発達して，馮夢龍編『三言』，凌蒙初編『二拍』，陸人龍著・陸雲龍評点『型世言』の中に，妓楼を舞台として，士人と商人，妓女の関係を描くものが多い。「玉堂春落難逢夫」「杜十娘怒沈百宝箱」「売油郎独占花魁」「王翠翹死報徐明山」などは，その時代の代表作として挙げられよう。その中の女性像は，堅強，剛直，情義を尽くしているが，相手の男性は怯懦で，財貨を貪り，色好みであり，官界の虜になるような醜態の限りを尽くしている。このような強烈な対比は，清末写情小説の中にも見られる。

だが，例えば，明代の梅鼎祚『青泥蓮花記』，清代の余懐『板橋雑記』のような作品は，雑事や細々とした伝聞の記録であるので，本格的な狭邪小説とは言えない。最初の狭邪小説は1848年ごろ（道光己酉年幻中幼了斎刊本）に刊行された陳森『品花宝鑑』であると言われている[45]。しかし，『品花宝鑑』は演劇界の役者と付き合う同性愛者の話である。明代，政府は士大夫が芸者を上げて遊ぶことを厳しく取り締まった。そこで，官僚士大夫は禁令を避けて，妓女ではなく，役者に目を向けた。それがいわゆる「狎優」である（芸者をあげて遊ぶのは狎妓と言う）。だが，典型的女性像が女優ないし同性愛者に変わったとしても，他方，男性像は始終文人であることには違いがない。文人と名優の組み合わせは，形を変えたが，文人と名妓の派生型と言えるだろう。

役者と文人の恋愛を語る『品花宝鑑』の後では，魏子安『花月痕』（1858年），兪達『青楼夢』（前出）が狭邪小説として有名である。狭邪小説はなぜ生まれたのか，換言すれば，才子佳人小説はなぜ狭邪小説になったのか。この点について，魯迅の指摘[46]によると，世間は『紅楼夢』の続書（他の人が，原著の終わりから続きを書くこと）に嫌気がさしたため，

ヒロインを佳人から役者に変えてみたが，（『紅楼夢』の舞台である）大観園の波瀾を知る者は多く（それだけでは不十分であったので），恋愛の舞台を色町に移したのであったと理解される。これは，狭邪小説と才子佳人小説の継承関係を示している。つまり，才子佳人小説の佳人を妓女か役者に変え，後園（裏庭）と閨房を妓楼と劇場に変え，普通の恋愛を浮気と同性愛に変えたのが狭邪小説である。

韓邦慶（子雲）『海上花列伝』（1894 年）になると，完全に遊廓の話である。ただ，この廓の女性は，伝奇小説の名妓ではなく，最下層の卑俗な妓女になってしまった。妓楼，妓女と遊び客の肉体関係などの黒い側面を暴露して，世の中に警鐘を鳴らしたのである。

さらに後，狭邪小説は次から次へと作られ，張春帆『九尾亀』（上海・点石斎，1906-1910 年），評花主人『九尾狐』（社会小説社，1908-1910 年）のような低俗な名前が付けられた。登場する妓女は下品であり，客も無頼漢のように作られている。『九尾亀』の類は妓女を攻撃し罵り，「廓の指南」と言われた。

以上のように見てくると，狭邪小説における妓女像の変化が分かる。魯迅は，「最初は，褒め過ぎるほど美化するが，中ごろは写実的に描写し，最後になると，悪を暴露するばかりである」(47) と指摘している。狭邪小説の氾濫は，この時期の上海の都市問題，社会問題を反映している。繁栄した経済と流動人口は，娼妓業の発達を促して，女性（妓女）は狡猾になり，淫蕩である。また，士大夫階層の堕落と市民階層の上昇によって，拝金主義，色好みの価値観が形成される。

### 3）新小説の新民「女性」

20 世紀初頭 1902 年になると，梁啓超をはじめとする知識人は「新小説」を道具にして，中国人に救国啓蒙の教育をしようとした。上層のエリート知識人が，まず取り上げたのが政治小説である。有名な「論小説与群治之関係」（「小説と群治の関係を論ず」）には，次のような言葉が見られる。

> 欲新一国之民，不可不先新一国之小説。故欲新道徳，必新小説；欲新宗教，必新小説；欲新政治，必新小説；欲新風俗，必新小説；欲新学芸，必新小説；乃至于新人心，欲新人格，必新小説。（一国の民を新たにしようとするのなら，まずはどうしてもその国の小説を新たにしなければならない。だから道徳を新たにしようとするなら，小説を新たにしなければならない。宗教を新たにしようとするなら，小説を新たにしなければならない。政治を新たにしようとするなら，小説を新たにしなければならない。風俗を新たにしようとするなら，小説を新たにしなければならない。学芸を新たにしようとするなら，小説を新たにしなければならない。人心を新たにする場合，人格を新たにしようとするなら，小説を新たにしなければならない。）(48)

小説の地位を向上しようとしたのは，小説が従来「文学」の部類に入れられていなかっ

たためである。小説を利用したいのならば，まずその政治的社会的意義を向上させなければならないが，それは士大夫階層に受け入れられやすい。確かに，イギリスの政治小説は政治家の道具となり，日本では森有礼の *Education in Japan*（New York: Appleton, 1873. 中国では，1897 年に林楽知が『文学興国策』として翻訳）があり，政治小説を書く政治家も多い。だが，何と言っても政治小説は「小説」であり，「政治」をあまりにも強調すぎると，「小説」の意味を離れ，長く続かない。そのために，梁啓超は民間の小説家・呉趼人を採用し，道徳と恋愛を合わせた「写情小説」という切り札を以て，『新小説』の発行を維持し，広範囲の普及をはかったのである。

つまり，写情小説は突然興ったわけではない。写情小説は古代人情小説の伝統を受け，中国文学の愛情重視の系譜に連なった。近代に近づくほど，時勢救国の「理想」「抱負」と緊密に繋がるようになった。救国するにはまず民を啓蒙する必要がある。民を啓蒙するには，まず女性を対象とせねばならない。だが，なぜ女性でなければならないのだろうか。

一つは，中国でも日本と同様に良妻賢母論を唱え，国家の問題を女性の弱さに帰結させる論調があったためである。もう一つは，妓楼が氾濫し，社会の気風が堕落し，士大夫階層が意気消沈の状態にあったので，知識人たちは狭邪小説を正そうとしたのである。しかし，狭邪小説を攻撃し，消滅させることよりも，むしろ積極的な面を伸ばすことで人々を導き，新しい民を作るほうが効率的であろう。そのため，高尚であろうと粗野であろうと，写情小説の女主人公には妓女は一人もいない。役者も官僚もなく，同性愛をはじめとする不正常な愛もない。彼女たちは，庶民の女性であり，良家の婦人ばかりである。

このように社会的背景を設定し，良家の婦人のイメージを作ることで，知識人たちは最後には新民を作り，中華を立て直すことを目指した。そして，このような女性がいるからこそ，文弱な男性像は際立ち，その結末は「無情の情場」[49] になるのである。これらの，徳を保持する女性における「女中華」のイメージ，文弱男性における文人イメージの投影については，別稿に譲りたい。

## おわりに

かつて，清末小説の研究者・阿英（銭杏邨。1905-77 年）は，写情小説に関して，社会的背景の描写のほか取るべきところがないと批評し，これが長い間定説となっていた。確かに，清末小説の中には「社会」を重視する小説が多いが，それらは歴史小説や譴責小説 [50] の類である。一方，写情小説には，自由恋愛，自主結婚の意識が芽生えて，西洋の学問を習い，近代的進歩思想を追求する人物が多々登場するにもかかわらず，結果的に伝統に復帰し，伝統と妥協する結末になるものが多い。つまり，根本的には，中国を「体」として，西洋を「用」とする観念が根強い。しかし，「社会」という背景は，従来の人情小説の中にほとんど見られない新しい要素である。写情小説家は「伝統」と調和可能な「近代」を創

り出したと言えよう。

ところが，時代背景はあくまでも小説上の舞台設定であり，写情小説は主として人間の情感を描くことを主眼とする。また，自由恋愛と自由結婚を追求する近代性が作中に表れるとは言え，それ一辺倒なわけではない。写情小説は，言葉を尽くして女性の美徳を称え，愛を追求する女性像を描く。一方，従来の女性の容姿に筆を費やす恋愛小説の書き方は，この時代になると変化した。華々しい服を脱ぎ，鮮やかな飾り物を捨てた，素朴で穏やかな女性たちが登場している。彼女たちは伝統的道徳を教えられ，親，夫，子供に対する責任と義務を担い，女性なりの母性愛を持っている。そこには，女性に対する同情心と女性解放に賛成する態度が表わされ，またこれらの実直な女性像には，堕落した都市文化の産物と見られる狭邪小説を是正する意図が籠められている。小説家はこのように時代に必要な国民の母，良家婦人を作ることによって，軟弱な中国の男性に警告を発し，彼らを奮い立たせる。そして，新国家建設に適した道徳の体現者である女性と，文弱な伝統文人を体現する男性との間に，次から次へと恋愛物語が演じられたのである。

［注］

⑴　狭邪小説：妓女を対象とする小説。1848 年に最初の作品『風月夢』から，20 世紀初頭にかけて，40 余部の狭邪小説が作られたという。

⑵　1900 年義和団「扶清滅洋」運動，8 カ国列強の北京入城事件。

⑶　『詩経』「周南・関雎」。

⑷　「割股療親」：太股の肉を割いて，薬といっしょに煎じると，親の病気に効くと言われている。

⑸　「如蛾赴火」：『梁書・到溉伝』如飛蛾之赴火，岂焚身之可吝。

⑹　白蓮教は，中国に南宋代から清代まで存在した宗教。本来は東晋の廬山慧遠の白蓮社に源流を持ち，浄土教結社（白蓮宗）であったが，弥勒下生を願う反体制集団へと変貌を遂げた。天台宗系の慈昭子元（-1166 年）が創始した。その後も白蓮教は革命を望む民衆の間で信仰され続け，異民族支配に反抗する秘密結社の紐帯となっていた。清の乾隆～嘉慶期には大規模な反乱を起こしたが，1813 年の天理教徒の乱を最後に沈静化した。

⑺　拙論「「美男」の誘惑――清末写情小説の「文弱」な男性像についての解読」『アジア地域文化研究』第 6 号，東京大学大学院総合文化研究科・アジア地域文化研究会，2010 年 3 月，81-96 頁。

⑻　『照世杯』（上海古籍出版社，1985 年），「序」105 頁：採閭巷之故事，絵一時之人情。『珍珠舶』（江蘇古籍出版社，1994 年），「序」161 頁：“小説家搜羅閭巷異聞，一切可驚，可愕，可欣，可怖之事”“述一時民風之盛衰”。

⑼　『快心編』（浙江古籍出版社，1987 年），「凡例」：従来伝奇小説，往往託興才子佳人。

⑽　魯迅『中国小説史略』（上海古籍出版社，2006 年），「明之人情小説（下）」，168 頁：『金瓶梅』『玉嬌李』等既為世所艶称，学歩者紛起，而一面又生異流，人物事状皆不同，惟書名尚多蹈襲，如『玉嬌梨』『平山冷燕』等皆是也。至所叙述，則大率才子佳人之事，而以文雅風流綴其間，功

名遇合為之主，始或乖違，終多如意，故当時或亦称為 “佳話”。察其意旨，每有与唐人伝奇近似者，而又不相関，蓋緣所述人物，多為才人，故時代雖殊，事跡輒類，因而偶合，非必出于倣効矣。

(11)　特に出典はないが，明代の湯顕祖『牡丹亭』をモデルとし，後世の人がまとめた才子佳人小説の公式。「才子佳人相見歓，私定終身後花園」「落難公子中状元，奉旨完婚大団円」のような言葉が民間で伝えられている。

(12)　李中馥「原李耳載・巻上」，『賢博編・粤剣編・原李耳載』（中華書局，2008 年），126 頁。

(13)　兪達『青楼夢序』（内蒙古人民出版社，2000 年），署“光緒四年（1878）戊寅古重陽日金湖花隠倚装序于蘇台行館”。

(14)　鴛湖煙水散人著『女才子書』（春風文芸出版社，1983 年）は，順治十六年ごろ完成。賢と智を標準にして，十二人の美人の話を記す。「凡例」6 頁：以寄其牢騒抑郁。

(15)　天花蔵主人『天花蔵合刻七才子書』（雍正庚戌退思堂重刊），「天花蔵合刻七才子書序」：以発泄其黄粱事業。「黄粱美夢」は，勝手に描いた願望が崩れ去ることの比喩。林辰『明末清初小説叙録』（春風文芸出版社，1988 年），65 頁より再引用。

(16)　代表的な作品として，『平山冷燕』『玉嬌梨』『飛花咏小伝』『両交婚小伝』『金云翹伝』『玉支磯小伝』『画縁小伝』『賽紅絲小伝』『麟児報』などが挙げられる。

(17)　『平山冷燕』「序」：予雖非其人，亦嘗窃執彫虫之役矣。顧時命不倫，即間擲金声，時裁五色，而過者若罔聞罔見。淹忽老矣！欲人致其身，而既不能，欲自短其気，而又不忍，計無所之，不得已而借烏有先生以発泄其黄粱事業。有時色香援引，爾女相憐；有時針芥関投，友朋愛敬；有時影動龍蛇，而大臣変色；有時気沖斗牛，而天子改容。凡紙上之可喜可驚，皆胸中之欲歌欲哭。『第三才子書：玉嬌梨・第四才子書:平山冷燕』（線装書局，2007 年），「四才子書序」187 頁より再引用。

(18)　屈原の『離騒』は，香草や美人を以て君臣の関係を比喩するものとされている。それ以来，「香草美人」はこの作品を指す文学的表現の一つとして広く使われている。王逸『楚辞章句補注』（吉林人民出版社，1999 年），3 頁「離騒経章句第一」：善鳥香草以配忠貞，悪禽，臭物以比讒佞。霊修，美人以媲于君，宓妃，佚女以譬賢臣；虬龍，鸞鳳以托君子，飄雲，雲霓以為小人。

(19)　林辰『明末清初小説叙録』（春風文芸出版社，1988 年），83 頁。

(20)　『大學』：心正而身脩。身脩而家齊。家齊而國治。國治而后天下平。『十三経注疏』中華書局，2008 年，1673 頁：心正而後身脩。身脩而後家齊。家齊而後國治。國治而後天下平。

(21)　『玉梨魂』（北京燕山出版社，1994 年），第四章，18 頁。

(22)　『電術奇談』（百花洲文芸出版社，1996 年），第一回，9 頁：郎君以奴為東亜女子，倘納以為妻，必有玷清門，故引為恥辱，不如早為絶念，這是郎君自為之計，何嘗念及奴之終身。

(23)　同上：仆与小姐，階級不同，種族不同，宗教亦不同。若小姐与仆結婚，貴国之人必大不以為然。

(24)　公案小説：伝統小説の一種。宋代の話本から発展して，特に明末に盛行した任侠，事件裁判を語る物語。

(25)　『劫余灰』（春風文芸出版社，1997 年），第四回，38 頁：莫是被人騙了你来香港，要拐你去売猪仔，倒是要小心点。這香港，不是個好地方。

(26)　同上，第十六回，145 頁：到了一処，把一衆人駆赶上岸。到了一処房屋，把我們一個個用麻布

袋装起来，便有人来講論価銭，逐個磅過，又在袋外用脚乱踢（中略）。這一個園子里，総共五百人做工，毎日受他那拳脚交加，鞭撻横施，挨飢受渇的苦。一個月内面，少説点，也要磨折死二，三十個人。

(27) 『恨海花』21 頁：彼西女化粧，天足，著小皮靴。不事脂粉而紅顔緑鬢，清麗無匹。操西語対答，防婢聞也。

(28) 同上，21 頁：中国風俗野蛮不自由者非惟君与妾也。

(29) 同上，22 頁：天演競争日烈，非智力優者無以勝存。

(30) 『瑶瑟夫人』13 頁「支那婦女如是」：我們英国極講究文明。還可以讓女子同男子交渉。其中情事尚且如此。那支那国男女之界防極厳。（中略）支那国把女人当着玩具。

(31) 『大明律』（法律出版社，1999 年），巻第十一，89 頁：凡師巫仮降邪神，書符咒水，扶鸞禱聖，自号端公，太保，師婆，及妄称弥勒佛，白蓮社，明尊教，白云宗等会，一応左道乱正之術，或隠蔵図像，焼香集衆，夜聚暁散，佯修善事，扇惑人民，為首者，絞；為縦者，各杖一百，流三千里。

(32) 武昌蜂起：1911 年 10 月 10 日，中国湖北省武昌で起きた兵士たちの清朝打倒の反乱。辛亥革命の発端となった。

(33) 『玉梨魂』第六章，32 頁：時局阽危，人才難得。命終泉石，我恨非済世之才；気壮山河，君大是救時之器。（中略）今者名士過江，紛紛若鯽，励我青年，救茲黄種，急起直追，此其時也。

(34) 同上，第十二章，69-70 頁：戊申之秋，肄業于鵞湖女校，得与四方賢女士交，眼界為之大拡，学術因之驟進，一泄従前禁錮深閨中，無限不平之気。

(35) 血書：決意の固さを示すために，自分の血で書いた文字。

(36) 『玉梨魂』第二十四章，142 頁：天地一情窟也，英雄皆情種也。血者，制情之要素也，流血者，即愛情之作用也。情之為用大矣，可放可巻，能屈能伸，下之極于男女恋愛之私，上之極于家国存亡之大。作用雖不同，而根于情則一也。故能流血者，必多情人，流血所以済情之窮。痴男怨女，海枯石爛，不変初志者，此情也；偉人志士，投艰蹈険，不惜生命者，亦此情也！能為児女之愛情而流血者，必能為国家之愛情而流血，為児女之愛情而惜其血者，安望其能為国家之愛情而拼其血乎？

(37) 『禽海石』（『中国近代珍稀本小説』8，春風文芸出版社，1997 年），「弁言」141 頁：茲編為言情小説，可与天下有情人共読之。読之而能勃然動其愛同種，愛祖国之思想者，其即能本区区児女之情而拡而充之者也。

(38) 中国殷王朝末期（紀元前 11 世紀ごろ）の紂王の妃。紂王に寵愛され，悪女の代名詞的存在として扱われる。

(39) 春秋末期の女性。越王勾践（こうせん）が，呉王夫差（ふさ）に，復讐のための策謀として美女の西施を献上した。策略は見事に当たり，夫差は彼女に夢中になり，呉国は弱体化し，ついに越に滅ぼされることになる。

(40) 秦末から楚漢戦争期の女性，項羽の愛人。劉邦が率いる漢軍に敗れた項羽は自殺し，虞美人もまた項羽の足手まといにならぬよう自害した。

(41) 唐代玄宗皇帝の寵姫。玄宗皇帝が寵愛しすぎたために安史の乱を引き起こしたと伝えられたことから，傾国の美女と呼ばれる。古代中国四大美人（楊貴妃・西施・王昭君・貂蟬（ちょうぜん））の一人とされる。なお，貂蟬は『三国志演義』の登場人物。

(42)　拙論「近代文人意識における道徳的理想 ―― 中日写情小説の女性像を中心に」，中国東北師範大学歴史学院『東亜思想史国際学術シンポジウム』発表，2007 年 8 月。

(43)　梁啓超「新民説」，『新民叢報』第 1 号-72 号連載，1902 年 2 月 8 日-1906 年 1 月 6 日。「新民」とは，帝国時代の皇帝の臣民から近代国家の国民に転身するという意味。

(44)　孫楷第（1898-1986），敦煌学研究者，古典文学者。『中国通俗小説書目』は人民文学出版社，1982 年刊。

(45)　魯迅『中国小説史略』「清之狭邪小説」233 頁。

(46)　同上，240 頁：惟常人之家，人数鮮少，事故無多，縦有波瀾，亦不適于『紅楼夢』筆意，故遂一変，即由叙男女雑沓之狭邪以発泄之。（中略）特以談釵黛而生厭，因改求佳人于倡優，知大観園者已多，則別辟情場于北里而已。

(47)　魯迅「中国小説的歴史的変遷」（『魯迅全集』第九巻，人民文学出版社，2005 年），349 頁：先是溢美，中是近真，臨末又溢悪。

(48)　梁啓超「論小説与群治之関係」，『新小説』1902 年第 1 期。陳平原・夏曉虹編『二十世紀中国小説理論資料（第一巻）』（北京大学出版社，1997 年），50 頁より再引用。

(49)　清末写情小説は「無情の情場」と言われる。「無情」は，封建社会のもとで抹殺された恋愛悲劇を意味するのではない。女性の片思いと男性の軟弱さのために生じるのである。

(50)　譴責小説とは，社会の暗闇を諷刺し批判する清末小説の一種である。1903 年，呉趼人『二十年来目睹之怪現状』，曾朴『孽海花』，劉鶚『老残遊記』，李伯元『官場現形記』という四大譴責小説が一斉に生まれた。